

複合助詞「にしたがって」と「につれて」

劉 怡 伶*

キーワード：複合助詞、「にしたがって」、「につれて」、内在的意味、語用論的な推論

要 旨

本稿は、複合助詞「にしたがって」と「につれて」の意味・用法を明らかにすることを目的とするものである。先行研究においてこの2語の区別は必ずしも明らかにされてはいないが、本稿では、2語を考察した結果、「にしたがって」と「につれて」は次のように記述することができるが明らかになった。

- (1) 2語は同様に〈漸進的な事態間の連動〉を表す用法がある。但し、この場合の「にしたがって」は、二つの事態の連動関係を必然的なものとしているという話し手の認識・認知を含意している。一方、「につれて」はこのような含意がない。
- (2) 「にしたがって」は「につれて」と異なり、〈規範的な連動〉を表す用法がある。
- (3) 「につれて」は「にしたがって」と異なり、〈受動的な連動〉を表す用法がある。

この結果に基づき、「にしたがって」の基本的意味は〈必然的な連動〉を表すもの、「につれて」の基本的意味は〈個別的な連動〉を表すものであることを明らかにした。また、このように記述することにより、2語の類似点と相違点、先行研究で説明されていない問題により一般性のある説明が与えられることを示した。

1. はじめに

複合助詞「にしたがって」と「につれて」は同様に、前件の事態に連動して後件の事態が生じることを表すものである。

*LIU Yi-Ling：東呉大学日本語文学系助理教授

¹複合助詞「にしたがって」「につれて」は動詞に由来する機能語である。動詞のテ形と比べ、複合助詞と化した動詞は次のような統語的な特徴を持っている。①主格(ガ格)がとれなくなる。②形態的に融合し、間に副詞など他の要素を入れられなくなる。③肯定、否定の対立、ボイス、テンス、アスペクト、モダリティなどの文法的カテゴリーを失う(松木(1990), Matsumoto(1998), 砂川(1987, 2000)などを参照のこと)。本稿では、①～③のような統語的特徴を持つ「にしたがって」「につれて」を考察の対象とする。なお、この2語は、それぞれ「にしたがって」「にしたがって」「につれて」「につれて」の形でも用いられるが、各形式は文体的特徴だけが異なると考えられるので、本稿では同じものとして扱うことにする。

- (1) 社会が複雑になる {にしたがって/につれて} 犯罪やトラブルは多様化している²。

(徳島新聞 06.4.20)

2語は類似した意味・用法を持っているものの、異なる意味・用法も持っている。

- (2) 減税の話 {につれて/*にしたがって} 出てくるのが、課税最低所得額が他国に比して高い
ということである。

(毎日新聞 98.8.19)

- (3) 再修正のポイントは(1)別途徴収の薬剤費の単価を、「受け取る薬の種類が増える {にしたがって/*につれて} 引き上げる」方式(衆院修正案)から「薬の種類が増える {にしたがって/*につれて}、1日当たりの単価を引き上げる」方式に改める。

(毎日新聞 97.6.10)

日本語学習者にとって難しいのは、この2語をどのように区別するかということである。本稿の目的は、「にしたがって」と「につれて」の意味・用法を明らかにすることである。

2. 先行研究

「にしたがって」「につれて」に関する先行研究には、森田・松木(1989)、塩入(1999)、国立国語研究所(2001)、田中(2001)、中溝(2004)、山崎(2005)、佐野(2005)、菅長(2006)、グループKANAME(2007)などがある。多くの先行研究では2語の意味・用法を記述する際に、前件と後件がどのような事態を表しているかに注目している。例えば、塩入(1999)では、前件と後件の動きは瞬間的な場合が不可能なことから、2語の前件と後件は同様に漸次的なものであると指摘している(下例は筆者による。(4)の前件と(5)の後件は瞬間的な動きを表している)。

- (4) 穴を一つだけ開ける {*にしたがって/*につれて}、光が少しずつ差し込んできた。
 (5) 次々と穴を開ける {*にしたがって/*につれて}、光が一瞬差し込んだ。
 (6) 次々と穴を開ける {にしたがって/につれて}、光が少しずつ差し込んできた。

塩入(1999)の記述から「にしたがって」「につれて」の共通点が窺える。

しかし、先行研究では、2語の相違点は必ずしも明らかにされているとは言えない。例えば、田中(2001)、グループKANAME(2007)では、「につれて」は「にしたがって」と異なり、後件に話し手の意志、命令を表す表現が来ないと述べている。

- (7) 利用客が増える {にしたがって/*につれて} 運行本数も順次増やすように {しよう/せよ}。
 (グループKANAME(2007:99))

しかし、(8)~(10)に示すように、「につれて」は後件に話し手の意志、相手への働きかけを表す表現が現れることがある。

- (8) 計画が進むにつれて細かいところを修正していくつもりです³。

² 用例括弧内の筆頭語を除き斜線の後ろの語は筆者による。以下同様。

³ 下線は筆者による。以下同様。

(<http://touring.fc2web.com/touring/nihon.htm>)

(9) 誰もが知っているような樹木に注目し、知識や体験が増えるにつれてそのレパトリーを増やしていきましょう。(栗田昌裕『頭がよくなる脳トレーニング』)

(10) 回復するにつれて徐々に元にもどしてあげてください。

(<http://www2.ocn.ne.jp/~fjok/report/059.html>)

従って、2語の意味・用法を記述するには、後件の文末表現を再確認する必要がある。またなぜ(7)のように「につれて」を用いることができないかを説明する必要もある。

田中(2001)では、「にしたがって」は「につれて」と比べて、「少しずつ」「刻一刻」などの副詞と共に起しやすいという特徴を持ち、「段階的な程度の漸進」ということに重きが置かれると述べられている。しかし、次に示すように、「につれて」も「少しずつ」「刻一刻」と共に起し得る。

(11) 家庭的な空気が少しずつ遠くへかすんでゆくにつれて、外部の新たな不安な空気が、私へ重くのしかかってきた。(豊島与志雄『或る男の手記』青空文庫)

(12) (略)一連の山々は、背後の光輝が愈々増すにつれて、刻一刻とその陰影を深めて参ります。(宮本百合子『C先生への手紙』青空文庫)

(11)(12)から、「段階的な程度の漸進」という記述では2語の違いを十分に説明することができないことが分かる。

新聞を対象に調査を行った山崎(2005)では、「にしたがって」は「につれて」と異なり、前件の述語に動詞「近づく」「経つ」があまり来ないことを指摘している。しかし、(13)(14)では、「にしたがって」の前件に「近づく」「経つ」が来ているが、不自然とは思われない。

(13) 選挙の期日が近づくにしたがって町々の狂熱がますます加わった。

(佐藤紅緑『ああ玉杯に花うけて』青空文庫)

(14) こうして一まずおちつきはしたものの、日がたつにしたがって、われわれにはまたべつな不安がはじまりました。(竹山道雄『ビルマの堅琴』新潮文庫100冊)

なぜ(13)(14)のような例では「にしたがって」の使用が「につれて」と同様に自然なのかについての説明が必要だと思われる。

本稿では、先行研究を踏まえながら、前述した問題を解決しより一般性のある記述を試みる。

3. 仮説の提示

本稿では、「にしたがって」「につれて」の特徴は次のように捉えることができると思う。

(15) 「にしたがって」と「につれて」の意味・用法の特徴：

① 「にしたがって」「につれて」は同様に〈漸進的な事態間の運動〉を表す用法がある。この用法では、語用論的な推論⁴により2語の前件と後件の間に因果関係の意味が読み取れるこ

とがある。但し、後件が前件に連動して生じるものかどうかを確信できない場合は、「につれて」を用いることができるのに対し、「にしたがって」は用いることができない。

② 「につれて」は「にしたがって」と異なり、〈受動的な連動〉を表す用法がある。

③ 「にしたがって」は「につれて」と異なり、〈規範的な連動〉を表す用法がある。

ここでは、田中（2001）に倣って、時間・空間の移動により次第に変容を見せていく事態を漸進的な事態と呼ぶ。また、二つの漸進的な事態が連動して生じることを表す用法を〈漸進的な事態間の連動〉を表す用法と呼ぶことにする。なお、本稿でいう〈受動的な連動〉を表す用法とは、一方の事態の発生を受け、もう一方の事態が受動的に発生することを表すもの、〈規範的な連動〉を表す用法とは、一方の事態の変化はもう一方の事態の変化に依拠することを表すものである。

以下の考察により、2語の意味・用法の違いや先行研究で説明がなされていない問題に統一的な説明が与えられることを示したい。

4. 漸進的な事態間の連動を表す「にしたがって」「につれて」

4-1. 漸進的な事態間の連動

本節では、「にしたがって」「につれて」は同様に漸進的な事態間の連動を表す用法があることを見る。

(16)(17)では、「にしたがって」「につれて」はそれぞれ名詞と動詞に後接しているが、2語は同様に二つの漸進的な事態の連動を表している。

(16) 暴動の拡大や長期化 {にしたがって/につれて}、国際世論も厳しくなることが予想され、日本のインドネシア支援が順調に実施されるかは不透明だ。 (毎日新聞 98.5.15)

(17) 犬を家族のように考える人たちが増える {にしたがい/につれ}、「なぜ禁止なのか」との不満も高まる。 (毎日新聞 02.11.14)

また、(18)のように、瞬間的な事態（「細胞が分裂する」）が繰り返される場合は、時間の経過により変化（「数が増える」）が生じるので、漸進的な事態と見なすことができる。従って、(18)でも、2語は同様に漸進的な事態間の連動を表していると言える。

(18) 次々と分裂する {にしたがって/につれて}、細胞数が増えてきた。

(16)~(18)と異なり、(19)の前件「一始める」は変化の開始、(20)の後件「～ていた」は結果の状態を表している。語用論的な推論により、それぞれ「金融状況が好転していく」「妙な気持ちになってきた」のような漸進的な事態の意味が読み取れる。従って、(19)(20)の「にしたがって」「につれて」も漸進的な事態間の連動を表している。

⁴ 語用論的な推論とは、文脈や言語外の知識を背景として導き出される推論のことである。詳しくは、山梨（1992）を参照。

(19) 金融安定化策は、危機的状況が落ち着きを見せ始める にしたがって/につれて、キナ臭いものに変質しつつある。
(毎日新聞 97.12.10)

(20) 加藤は浜坂に近づく にしたがって/につれて 妙な気持ちになっていた。
(新田次郎『孤高の人』新潮文庫 100 冊)

上の考察から、「にしたがって」「につれて」は漸進的な事態間の連動を表す用法があること、また前件と後件の事態の意味は、しばしば語用論的な推論が介在していることが分かる⁵。

このような記述を用いて、前件と後件の共起表現について説明することができる。まず、(21)～(24)のように、2語の後件には話し手の意志、命令を表す形式が現れることがある。

(21) 計画が進むにつれて細かいところを修正していくつもりです。
(例(8)を再掲)

(22) 誰もが知っているような樹木に注目し、知識や体験が増えるにつれてそのレパトリーを増やしていきましょう。
(例(9)を再掲)

(23) この小説が進むにしたがって、読者とともに考えてゆくつもりである。
(『国盗り物語』新潮文庫 100 冊 CD-ROM 版)

(24) 回復するにしたがって標準量に向かって一日一日量を増やしてください。
(www.azmira-japan.co.jp/petfood/8.html)

田中(2001)では「につれて」は後件に話し手の意志、命令を表す表現が来ないと説明している。
(25) *戦況が厳しくなるにつれ、思想を取り縮まれ。
(田中(2001)の例(38a))

後件に現れる動詞述語に注目してみると、(25)と異なり、(21)～(24)では後件は漸進的な事態の意味が含まれている。従って、話し手の意志、命令を表す形式は、後件の動詞述語に漸進的な意味が含まれている場合、2語の後件に現れることが可能であると言える。

次に、2語の直前に動詞のル形のほか、補助動詞「ていく/てくる/はじめる」が現れることがあるが、動詞のタ形、補助動詞「ている/つつある」は現れることがない。

(26) 重症化する にしたがって/につれて 吸う息が苦しくなる。
(毎日新聞 97.8.3)

(27) 工場が建ち、村が都市化されていく にしたがって/につれて、男たちは都市で稼いだ金で買春に走るようになった。
(毎日新聞 96.2.22)

(28) 小泉流の選挙手法が見えてくる にしたがって/につれて、情報のエントロピーも低下してくだらう。
(毎日新聞 05.8.18)

(29) 金融安定化策は、危機的状況が落ち着きを見せ始める にしたがって/につれて、キナ臭いものに変質しつつある。
(例(19)を再掲)

(30) 高齢に なる/*なった/*なっている にしたがって個人差が大きくなっていく。

(31) 高齢に なる/*なった/*なっている につれて個人差が大きくなっていく。

⁵ 2語の前件と後件の漸進的な事態の意味は語用論的な推論によることがあることについては中溝(2004)に同様の記述がある。

(32) その疑問は、この本を「読む/*読んでいる/*読みつつある」にしたがって次第に大きくなってきた。

(33) その疑問は、この本を「読む/*読んでいる/*読みつつある」につれて次第に大きくなってきた。

直前の述語に動詞のル形、「ていく/てくる/はじめる」が用いられる場合は、漸進的な事態の意味が読み取れると考えられる。従って、これらの表現は2語の前に現れることが可能である。一方、タ形、「ている」（「高齢になっている」の場合）は事態の実現、結果の状態を表し、「ている」（「読んでいる」の場合）、「つつある」は進展的な動きを状態的に取り上げる表現である⁶。これらの形式が前件に用いられる場合は、時間の推移により次第に変容を見せていくといった動的な変化の意味は読み取れない。従って、動詞のタ形、「ている/つつある」は2語の前に現れることがない。

以上、2語は漸進的な事態間の連動を表す用法があること、更に前件と後件の共起表現が説明できることを示した。

4.2. 因果関係の意味の派生

前節では、「にしたがって」「につれて」には漸進的な事態間の連動を表す用法があることを見た。本節では、更に、この用法では、語用論的な推論により前件と後件の間に因果関係の意味が読み取れることがあることを見る。

森田・松木（1989）では、2語の前件と後件は単なる時間的な相関関係にとどまらず、因果関係が生じているものもあると指摘している。確かに、漸進的な事態間の連動を表している(34)のような例では、前件と後件に因果関係の意味が読み取れる。（⇒の矢印は、推論による含意関係を示す。以下同様）

(34) チェチェン人は従来、穏健なイスラム教徒が多いが、ロシアの圧力が強まる |にしたがって/につれて|、過激思想が主流になってきた。 (毎日新聞 04.9.6)

⇒ チェチェン人は過激思想が主流になってきたのは、ロシアの圧力が強まったからである。

しかし、この場合に読み取れる因果関係の意味は2語の内在的意味⁷ではなく、語用論的な推論によって生じるものである。これは、次に示すように、(34)の後ろに「しかし、過激思想が主流になってきたのは…」などの文脈を付け加えることにより、前件と後件の因果関係を打ち消すことが可能なことから窺える⁸。

⁶「ている（継続相）」「つつある」は動作、現象が始まって、終わらずに今存在していることを表すもので、進展的な動きを状態的に取り上げる表現と言える。詳しくは寺村（1984：125-146）、森山（1988：138-170）を参照のこと。

⁷内在的意味とは、表現形式が本質的に有する意味のことである。益岡（1991）を参照。

⁸語用論的な推論による意味は文脈により打ち消すことが可能なことについては、Grice（1975）、山梨（1992：14-19）を参照のこと。

(35) チェチェン人は従来、穏健なイスラム教徒が多いが、ロシアの圧力が強まる {にしたがって/につれて}、過激思想が主流になってきた。しかし、過激思想が主流になってきたのは、ロシアの圧力が強まったためというより、民衆を意図的に煽った輩がいるからである。

(34)と(35)の比較から、(34)で読み取れる因果関係の意味は前後のテキストからの語用論的な推論によると言える。この場合、前件と後件の関連が聞き手の中の因果関係の論理に合致しているため、因果関係の意味が読み取れると言える⁹。

以上、漸進的な事態間の連動を表す用法では、2語の前件と後件に読み取れる因果関係の意味はしばしば語用論的な推論によることを見た。

4-3. 話し手の認識・認知

本節では、漸進的な事態間の連動を表す「にしたがって」と「につれて」の相違点を見る。

(36)～(38)に示すように、漸進的な事態間の連動を表している「につれて」の例では、直後に「かどうか知らないが/かどうか分からないが」といった表現が現れることがある。「にしたがって」はこのような例では用いることができない。

(36) A型の作家さんが増える {につれて/*にしたがって} かどうか知りませんが、そういう熱い要素が徐々に抜けてたようです。

(<http://cheese.2ch.net/fortune/kako/971/971662890.html>)

(37) それ {につれて/*にしたがって} かどうかは分からないが、最近スーパーやコンビニにおいても、懐かしい駄菓子が徐々に店頭から姿を消しているように思える。

(<http://www.rpress.net/r/200605/zaregoto.htm>)

(38) 六〇年安保の挫折から、新劇内の左翼・反体制ムードも徐々に拡散し、うすまり、それ {につれて/*にしたがって} かどうかはわからないが、労演の勢いにもかげりが見えてきていた。

(<http://www5b.biglobe.ne.jp/~tasai/honyaku-ka/hon01.html>)

(36)～(38)では、話し手は「につれて」の直後に「かどうか知らないが(分からないが)」を付け加えることにより、後件が前件に連動して生じるものかどうかを確信していないことを表している。(36)～(38)から、前件と後件に連動関係があるかどうかを確信できない場合は「につれて」を用いることができるのに対し、「にしたがって」は用いることができないことが分かる。

「にしたがって」は話し手が前件と後件の連動関係を確信している場合に限って用いられる理由は、次のためであると考えられる。即ち、「にしたがって」は、話し手が二つの事態の連動関係を必然的なものとして認識・認知していることを含意しているからである。従って、前件と後件の連動関係を確信できない場合に「にしたがって」を用いると矛盾が生じる。

⁹ 因果解釈については、Grice (1975)などを参照のこと。

上の分析が妥当であることは次の2例によって確かめられる。(39)(40)では、前件と後件は同様であるが、二つの事態の連動関係を確認できないことを表す「かどうかは分からないが」が用いられている(40)では「にしたがって」は用いることができない。

(39) 社会が複雑になる {にしたがって/につれて} 犯罪やトラブルは多様化している。

(例(1)を再掲)

(40) 社会が複雑になる {*にしたがって/につれて} かどうかは分からないが、犯罪やトラブルは多様化している。

(39)では、前件と後件から必然性の意味を読み取ることが可能である。前述のように「にしたがって」は「につれて」と異なり、二つの事態の連動関係を必然的なものとしているという話し手の認識・認知を含蓄している。従って、(39)では「にしたがって」を用いている場合に読み取れる必然性の意味は内在的意味で、「につれて」を用いている場合に読み取れる必然性の意味は語用論的な推論によるものと言える。(40)では、「かどうかは分からない」が用いられているので、前件と後件に必然的な意味が認められない。従って、(40)では「にしたがって」を用いることができない。

以上、話し手の確信という視点から、漸進的な事態間の連動を表す「にしたがって」と「につれて」の違いを見た。

5. 受動的な連動を表す「につれて」

本節では、「につれて」は「にしたがって」と異なり、受動的な連動を表す用法があることを見る。

(41)~(43)のように「につれて」は漸進的な事態間の連動を表さない場合がある。各例では前件「笑い出す/言葉を言う/声をかける」は一瞬で終わる事態を表している¹⁰。

(41) 両親は嬉しそうに笑い出し、それ {につれて/*にしたがって} 私も「アハハー」と大笑いしたが、(略) (弘松生末子『二十世紀を生きてきて』)

(42) 「匂いがしますよ」などという言葉 {につれて/*にしたがって}、鼻をひくひくさせたりするのは、みていられない気持だった。 (中井英夫『中井英夫作品集』)

(43) 「おはいいい」多少無理をした声で、私はいった。声 {につれて/*にしたがって}、ドアがかすかにきしんで開き、ほの暗いスタンドのなげかけるうす明りの中に、陰気な顔つきの中年男が、左半身を戸の所にのぞかせた。 (小松左京『墓標かえりぬ』)

¹⁰ このような用法は文学作品に多く見られ、新聞にはあまり用いられない。『毎日新聞』のCD-ROM(1996年~2005年)を調査したところ、漸進的な事態間の関連を表さない「につれて」は次の1例しかない。

(a) 減税の話につれて出てくるのが、課税最低所得額が他国に比して高いということである。

(例(2)を再掲)

(41)～(43)の「につれて」も、前件の事態に連動してどのような事態が生じるかを後件で表している。しかし、4節で見た例と異なり、この場合の「につれて」は前件の事態の発生を受け、後件の事態が受動的に発生することを表している。各例の後件の事態は前件の事態に引きつられて起こるもので、前件と後件の間に継起的な関係があると言える。受動的な連動を表している特徴は、意図的な動作を表す表現が後件に現れないことから窺える。

(41) *両親は嬉しそうに笑い出し、それにつれて私もわざと大笑いした。

(42) *匂いがしますよという言葉につれて、鼻をひくひくさせたりしてみた。

(43) *声につれて、ドアを少しずつ開けなければならない。

受動的な連動を表す「につれて」は更に二つの特徴を持っている。一つは(41)～(43)から分かるように、この場合の「につれて」が名詞に後接することである。もう一つは「につれて」は直後に不確かなことを表す「かどうかは知らないが」などの表現が来ないことである。

(41)" *両親は嬉しそうに笑い出し、それにつれてかどうかは知らないが、私も「アハハー」と大笑いした。

(42)" *「匂いがしますよ」などという言葉につれてかどうかは知らないが、鼻をひくひくさせたりするのは、みていられない気持だった。

(43)" *声につれてかどうか分からないが、ドアがかすかにきしんで開いた。

前述のように、(41)～(43)のような例では、直前の名詞は後件の事態を引き起こす原因を表しており、後件は前件の事態の発生を受けて受動的に発生するもの、言い換えれば、後件は前件を契機として起こる事態と言える。従って、この場合の「につれて」の直後に不確かなことを表す「かどうか分からないが」などの表現が来ないと考えられる。

また、漸進的な事態間の連動を表す「につれて」と受動的な連動を表す「につれて」は中間的な用法がある。(44)～(46)では、直前の名詞から漸進的な事態の意味と、前件が後件を引き起こす原因の意味が読み取れるので、この場合の「につれて」は、受動的な連動を表す用法と漸進的な事態間の連動を表す用法と共通する性質を持っていると言える。「にしたがって」は受動的な連動を表す用法がないので、これらの例では用いることはできない。

(44) 夜になると、やっぱりチャランチャランと言う音が風 {につれて/*にしたがって} 近所の村中へきこえて来ます。
(夢野久作『ツク法師』青空文庫)

(45) 雨 {につれて/*にしたがって}、気温も下り、四辺の空気も大分すがすがしく軽やかになっただらしく感じる。
(宮本百合子『長崎の印象』青空文庫)

(46) (略) 醫員は手を出して、青ざめた赤児の心臓部のあたりを揉みはじめた。その運動 {につれて/*にしたがって}、赤児の首はぐなりぐなりと揺れて動くのを、看護婦がそつと手で押へた。
(水野仙子『嘘をつく日』青空文庫)

なお、(44)～(46)から分かるように、この場合の用法は自然的(物理的)現象によるものが特

徹的である。注意すべきは、受動的な連動を表す意味を持つ「につれて」（中間的な用法を含む）は、直前に動詞が現れないことである。（47）に示すように、動詞に後接している「につれて」は、後件に義務を表す表現が来ることが可能である。従って、（47）の「につれて」は受動的な連動を表しているものではない。

（47） 目標は、時代が変わるにつれて |変わるのである/変えていかなければならない|。

以上、「につれて」は「にしたがって」にない、受動的な連動を表す用法があることを見た。

6. 規範的な連動を表す「にしたがって」

本節では「にしたがって」は「につれて」と異なり、規範的な連動を表す用法があることを見る。

前述のように、「にしたがって」には「につれて」と同様に漸進的な事態間の連動を表す用法があるが、（48）（49）における「にしたがって」はこのような用法ではない。それぞれの前件「患者が重症になる」「薬の種類が増える」と後件「患者を初期、2次、3次救急病院と振り分けて搬送する」「薬剤費の単価を引き上げる」は時間・空間の移動により次第に変容を見せていくことを表しているものではない。

（48） 救急患者は症状に応じ重症になる |にしたがって/*につれて|，初期，2次，3次救急病院と振り分けて搬送するのが一般的だ。 (毎日新聞 02.11.5)

（49） 再修正のポイントは(1)別途徴収の薬剤費の単価を、「受け取る薬の種類が増える |にしたがって/*につれて| 引き上げる」方式（衆院修正案）から「薬の種類が増える |にしたがって/*につれて|，1日当たりの単価を引き上げる」方式に改める。 (例(3)を再掲)

（48）（49）では「にしたがって」は、後件の事態の変化が前件の事態の変化に依拠していること（つまり、「搬送先の決定」「単価の決定」といった事態の変化は「患者の重傷度」「受け取る薬の種類」といった事態の変化を基準にしていること）を表し、動詞「したがう」の意味を色濃く残していると言える。従って、この場合の「にしたがって」は、規範的な連動を表す用法と呼ぶことができる。これらの例では「につれて」を用いることができないので、「につれて」は規範的な連動を表す用法がないと思われる。

また、漸進的な事態間の連動を表す「にしたがって」と規範的な連動を表す「にしたがって」には「につれて」の場合と同様に中間的な用法がある。（50）（51）では、前件と後件から漸進的な事態の意味と、後件の事態の変化は前件の事態の変化に依拠しているという意味が読み取れるので、この場合の「にしたがって」は、漸進的な事態間の連動を表す用法と、規範的な連動を表す用法と共通する性質を持っていると言える。「につれて」は規範的な連動を表す用法がないので、このような例では用いることができない。

（50） 記録の藤倉勇樹三段が前日の指し手を読み上げるの |にしたがって/*につれて|，両者は

34 手目・7 三桂までの局面を再現した。

(毎日新聞 01.2.20)

- (51) 池代二段が棋譜を読み上げるの {にしたがいで/*につれて}, 両雄が1日目の着手を再び指していく。
(毎日新聞 05.6.1)

漸進的な事態間の連動を表す用法ではなく、動詞の意味を色濃く残している「にしたがって」に関する記述はグループ KANAME (2007) にもある。ただ、グループ KANAME (2007) では(52)のような名詞に後接している例に注目している。しかし、注意したいのは、名詞に後接している「にしたがって」は動詞に後接している場合と異なり、複合助詞とも動詞とも解釈可能なことである。次に示すように、(52)では「にしたがって」は「によって」「におうじて」に置き換えることができるので、複合助詞の機能を果たしていると言える¹¹。また、グループ KANAME (2007) の指摘のように、この場合の「に X にしたがって Y」は「X にしたがう。」という形をとることができる。従って、このような例における「にしたがって」は動詞の性質を色濃く残していると言える。

- (52) 最終的な売上高にしたがって、手当での支給額が決められる。

(グループ KANAME (2007: 95))

- (52)' 最終的な売上高 {によって/におうじて}, 手当での支給額が決められる。

- (52)" 手当での支給額は、最終的な売上高にしたがう。

(52) (52)"から、動詞「したがう」の用法と複合助詞「にしたがって」の用法は連続的なものとして捉えることができると言える。

以上「にしたがって」は「につれて」と異なり、規範的な連動を表す用法があることを見た。

7. 「にしたがって」と「につれて」の基本的意味

本節では「にしたがって」と「につれて」の基本的意味¹²を述べる。

まず、これまでの考察結果をまとめると、2語の類似点と相違点は次のようになる。

- (53) 「にしたがって」「につれて」の類似点と相違点：

- ① 2語は同様に〈漸進的な事態間の連動〉を表す用法がある。但し、この場合の「にしたがって」は、話し手が二つの事態の連動関係を必然的なものとして認識・認知していることを含意している。一方、「につれて」はこのような含意がない。

¹¹ グループ KANAME (2007) では、(52)の「にしたがって」は「によって」「におうじて」とパラフレーズの関係にあるとは述べていないが、その意味については次のように説明している。「(この例で) 先行する事柄「最終的な売上高」を一つに決まるものと捉える場合には、「最終的な売上高によって、手当での支給額が決められる」という表現に近い。これを多様であったり、変動するものと捉える時は、「最終的な売上高に応じて、手当での支給額が決められる」という表現に近い」。

¹² 本稿では翔山 (2008) に従い、「語が指し示す対象のすべてに該当する意味であり、かつ、類義語との弁別的特徴を含むもの」を基本的意味と呼ぶ。

② 「にしたがって」は「につれて」と異なり、〈規範的な連動〉を表す用法がある。

③ 「につれて」は「にしたがって」と異なり、〈受動的な連動〉を表す用法がある。

(53)に基づき、2語の基本的意味は次のように考えられる。まず、「にしたがって」は基本的に〈必然的な連動〉を表すものと言える。なぜなら、〈規範的な連動〉を表す用法では、後件の事態の変化は前件の事態の変化に依拠しているものなので、後件の事態は前件の事態による必然的な結果と言える。また、前述のように、漸進的な事態間の連動を表す「にしたがって」は、事態間の連動関係を必然的なものとしているという話し手の認識・認知を含意しているが、このような認識・認知は、話し手の中の必然的な法則・規範（つまり「一方の事態が生じるならばもう一方の事態が必ず生じる」）に依拠していると考えられるからである。

一方、「につれて」は基本的に〈個別的な連動〉を表すものと言える。前述のように、「につれて」は〈漸進的な事態間の連動〉を表す用法（例：「社会が複雑になるにつれてかどうかは分からないが、犯罪やトラブルは多様化している」）と〈受動的な連動〉を表す用法（例：「雨につれて気温も下がり始めている」）があるが、どちらの場合でも、前件と後件の連動関係についての判断は話し手の中の個別的な法則・規範（つまり「一方の事態が生じるならばもう一方の事態が生じることがある」）に基づいているものと考えられるからである。このように記述することにより、2語を区別することができると思われる。

8. 問題の解決

本節では、これまでの考察により先行研究で説明されていない問題を説明できることを示す。

まず、「につれて」を用いることができない例を見る。

(54) 利用客が増える {にしたがって/*につれて} 運行本数も順次増やすように {しよう/せよ}。

(例(7)を再掲)

前述のように「につれて」は後件に話し手の意志、命令を表す表現を用いることがある。(54)で「につれて」を用いることができないのは、先行研究の説明のように、後件に意志表現、命令表現が来ているためではないと言える。(54)の前件と後件においては、話し手は「にしたがって」を用いて、二つの漸進的な事態が連動して生じていることと、後件の事態の変化「運行本数の増加」が前件の事態の変化「利用客の増加人数」に依拠していることを表している。つまり、この場合の「にしたがって」は漸進的な事態間の連動を表す用法と規範的な連動を表す用法の中間的なものと言える。前述のように「につれて」は規範的な連動を表す用法がない。従って、(54)では「につれて」は用いることができない。

次に「にしたがって」を用いることができない例を見る。

(55) 減税の話 {につれて/*にしたがって} 出てくるのが、課税最低所得額が他国に比して高

いということである。

(例(2)を再掲)

(55)では「減税の話が出る」という事態の発生を受けて「課税最低所得額が高いという問題が出てくる」という事態が受動的に生じていること、つまり受動的な連動を表している。この場合の「につれて」は受動的な連動を表していることは、後件に義務、希望を表す表現を用いることができないことから窺える。

(55) 減税の話につれて課税最低所得額が高いという問題 |が出てきた/*を取り上げなければ
ならない/*を取り上げたい|。

従って、(55)では「にしたがって」は用いることができない。

最後に、次の問題を見る。(56)(57)では直前は同様に「経つ」が来ているが、(56)で「にしたがって」を用いると不自然になる。

(56) 逮捕から時がたつ |につれて/?にしたがって|「病院と副院長夫妻を困らせたかった」な
どとやや具体的な供述を始めている。 (毎日新聞 01.1.11)

(57) こうして一まずおちつきはしたものの、日がたつにしたがって、われわれにはまたべつな
不安がはじまりました。 (例(14)を再掲)

前述のように、「にしたがって」は、二つの事態の連動関係を必然的なものとしているという話し手の認識・認知を含意している。(56)の前件と後件に関しては、前件の事態「逮捕から時がたつ」が発生した場合、後件の事態「具体的な供述を始める」が前件の事態に連動して生じる必然的なものであると話し手が思っていることを想定することが難しいと思われる。従って、(56)では「にしたがって」を用いると不自然になる。一方、(57)の前件と後件に関しては、前件の事態「日がたつ」が発生した場合、後件の事態「また不安が始まる」がそれに連動して生じる必然的なものであると話し手が思っていることを想定することが可能である。従って、(57)では「にしたがって」を用いることができると考えられる。

9. 今後の課題

最後に、残された課題を述べる。まず、本稿の考察対象「にしたがって」「につれて」は名詞を修飾する用法(つまり「につれてのN」「にしたがってのN」)があるが、本稿ではそれについて考察しなかった。しかし、「にしたがって」の名詞修飾の用法は、「につれて」にはない「にしたがうN」の語形も用いられるので、こうした用法に注目することにより、2語の違いだけでなく、動詞の中止形を含む複合助詞の名詞修飾の用法の特徴を明らかにすることができると思われる。また2語と類似する意味を持つ複合助詞に「とともに」「にともなって」「におうじて」もあるが、これらの複合助詞の用法と比較分析することにより、2語の考察を深めることができるとと思われる。更に、2語の文法化の考察は、空間概念にかかわる動詞が時間概念に関わる複合助

詞へ変化する際にどのような意味変化の特徴が見られるかなどの問題の解明に役立つ(砂川(2000)では、この2語のほか「にともなって」「をつうじて」「にわたって」なども空間表現から時間表現へ変化したものと説明している)。これらの問題を今後の課題にしたい。

参 考 文 献

- グループ KANAME (2007) 『複合助詞がこれでわかる』 ひつじ書房
- 国立国語研究所 (2001) 『現代語複合辞用例集』 国立国語研究所
- 佐野裕子 (2005) 「複合辞ニツレテ・ニトモナッテをめぐって」 『日本語・日本文化研究』 15, 145-155
- 砂川有里子 (1987) 「複合助詞について」 『日本語教育』 62, 42-55
- (2000) 「空間から時間へのメタファー—日本語の動詞と名詞の文法化—」 『空間表現と文法』 くらしお出版, 105-142
- 塩入すみ (1999) 「「変化の連動」を表す副詞説の分析—トトモニ・ニツレ・ニトモナイ・ニシタガイ—」 『東呉日語教育学報』 22, 72-89
- 菅長理恵 (2006) 「用法と語法—『～にしたがって・～につれて』を中心に—」 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 32, 47-61
- 田中寛 (2001) 「漸進性をあらわす後置詞—“—につれて”などをめぐって」 『大東文化大学紀要』 39, 97-122
- (2004) 『日本語複文表現の研究 接続と叙述の構造』 白帝社
- 陳君慧 (2005) 「文法化と借用—日本語における動詞の中止形を含んだ後置詞を例に—」 『日本語の研究』 1-3, 123-138
- (2006) 『日本語における動詞の中止形を含んだ複合後置詞の形成—借用と文法化の相互作用—』 麗澤大学言語教育研究科, 博士論文
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』 くらしお出版
- 中溝朋子 (2004) 「『～にしたがって』と『～につれて』」 『大分大学留学生センター紀要』 1, 57-70
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』 くらしお出版
- 松木正恵 (1990) 「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」 『早稲田大学日本語研究センター紀要』 2, 27-52
- 羽山洋介 (2008) 「メタファーの認知的基盤と経験的基盤」 『日本語の魅力』 名古屋大学大学院日本言語文化研究科
- 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型：用例中心・複合辞の意味と用法』 アルク
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院
- 山崎誠 (2005) 「新聞記事データに見る「につれて」「にしたがって」」 『論理的な日本語表現を支える複合辞形式に関する記述的総合研究』 平成14～16年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(B)(I) 研究成果報告書, 59-65
- 山梨正明 (1992) 『推論と照応』 くらしお出版
- 劉怡伶 (2006) 「「つれる」の文法化—動詞から複合助詞へ—」 『台大日本語文研究』 12, 123-152
- (2007) 「動詞「したがう」「ともなう」の文法化」 『台湾日本語文学報』 22, 213-238
- Grice, H.P. 1975. Logic and conversation, in Cole, P and J. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics, 3: Speech Acts*, 41-58. Academic Press.
- Matsumoto, Yo 1998. Semantic Change in the Grammaticalization of Verbs into Postpositions in Japanese. in Toshio Ohori (ed.), *Studies in Japanese Grammaticalization—Cognitive and Discourse Perspectives*, 25-60, Kuroshio Publishers.
- Traugott, Elizabeth Closs and Ekkehard Konig 1991. The Semantics-Pragmatics of Grammaticalization Revisited, Elizabeth Closs Traugott and Bernd Heine (eds.), *Approaches to Grammaticalization Volume I*, 189-218, John Benjamins.

付記

本稿は、劉（2006, 2007）で個別に提示した事例研究をベースに、最新の研究成果を視野に、拡大発展させたものである。また、本稿の執筆にあたり、匿名の本誌査読者から有益な助言を頂戴した。記して感謝申上げたい。言うまでもなく、本稿の誤りについての責任はすべて筆者にある。なお、本研究は、2006年度台湾行政院国家科学委員会専題研究計画（計画番号：95-2411-H-031-009-）の成果の一部である。